# 外国人管理情報システムと統計情報装置
## 社会批評としての統計学の伝統を継承すること

**山田 満（高崎商科短大）**

…… Aber in dem Maße, wie die Geschichte vorschreitet und mit ihr der Kampf des Proletariats sich deutlicher abzeichnet, haben sie nicht mehr nötig, die Wissenschaft in ihrem Kopfe zu suchen; sie haben nur sich Rechenschaft abzulegen von dem, was sich vor ihren Augen abspielt, und sich zum Organ desselben zu machen. Solange sie die Wissenschaft suchen und nur Systeme machen, solange sie im Beginn des Kampfes sind, sehen sie im Elend nur das Elend, ohne die revolutionäre, umstürzende Seite darin zu erblicken, welche die alte Gesellschaft über den Haufen werfen wird. Von diesem Augenblick an wird die Wissenshaft bewußtes Erzeugnis der historischen Bewegung, und sie hat aufgehört, doktrinär zu sein, sie ist revolutionär geworden. (Karl Marx, *Das Elend der Philosophie*, Dietz Verlag, Berlin 1971, S.127. ；E. ベルンシュタインとK. カウツキーによるフランス語からのドイツ語訳 ☞『哲学の貧困』国民文庫、p.171 ）

1. 本報告の課題は、外国人管理情報システムの仕組みとそこで働く統計情報装置の位置と役割を考察することを経由して、社会科学としての統計学の現状と課題を考えることである。そのために本報告は、「社会批評としての統計学」という概念（concept）をサブタイトルに導入した。
   1.1. この表現自体は新しいものでなく、また統計学を批評行為として把握することは、日本の社会統計学の伝統の中に深く根差したものであると思われる。
      1.1.0.1. 例えば、1950年代の上杉正一郎氏の仕事のあるものは「批評行為としての統計学」の運動として読むことができる。

2. 経済統計学会は、その会則に学会の目的として「１．社会科学に基礎をおいた統計理論の研究、２．統計の批判的研究、３．すべての国々の統計学会との交流、４．共同研究体制の確立」を掲げている。ここでは、この１．と２．について取り上げ、「社会批評としての統計学」という概念（concept）を提示する予備作業を行っておきたい。
   2.1. 先ず、「社会科学に基礎をおいた統計理論の研究」という表現は、多義的である。
      2.1.1. 第一に、この表現は「社会科学としての統計学」を指示している：統計理論（の研究）は、社会科学的対象をそれ自身の研究領域として設定する社会科学である。
      2.1.2. しかし、この表現は、「社会科学のための統計学」を志向するものとして読むこともできる。この場合、問題になっているのは、社会科学の研究に役立つための統計学（の研究）である。社会科学の研究領域の独自性に即した社会科学研究への統計学の応用が問題である。統計学自身が、どのような研究領域に属する学問なのかは、さしあたり問題でない。
   2.2. 他方、「統計の批判的研究」という表現は研究の対象と研究方法（態度；Style）に言及する。研究対象としての「統計」、研究方法（態度）としての「批判的」である。
      2.2.1. 「統計」という社会的認識効果を産出し、制度的構築物として歴史化していく社会的･歴史的諸力の研究が問題（＝重要）であり、そうした研究の成果として獲得される「統計」に関する知識が、すべての統計利用の基礎である。「統計一般」ではなく、各々の統計がもつ固有の性質に見合った利用法が考えられなければならない。一般的な統計利用の方法を問題にするのではなく、個々の統計の利用法が、その利用の具体的場面に即して考えられなければならない。
      2.2.2. 「統計」の研究は、「批判的」でなければならない。社会の中での「統計」の働きが解明されなければならない。各々の統計は、どのような目的で作成され、どのような仕方で利用され、その結果、どのような社会的効果が産出されるのか、が分析されなければならない。そのような分析は、歴史的に制度化された社会的実践（社会作用を産出する運動形態）としての「統計的なもの」にたいして、どのような仕方であれ、一定の「批判的」な距離（「客観的」な態度）を取ることを要求する。そして、この距離･態度の取り方の問題は、各々の統計に、どのような社会的働きを期待するかの問題（＝統計利用の問題）と分節化（結合）しているはずである。

2.3. 以上のように理解したとき、「統計の批判的研究」という目的の設定は、統計学を「社会科学として」把握することを要求する。すくなくとも、「社会科学のための統計学」があるとしたら、それは「社会科学としての統計学」の基礎の上においてである。

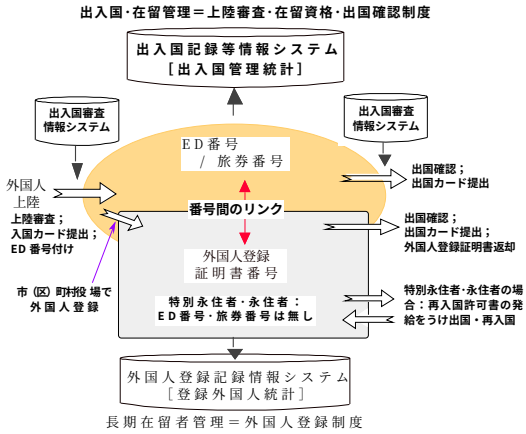
3. 本報告は、統計学を「社会批評のアクト(acte)」として把握する。「社会科学としての統計学」という規定の社会科学を、なぜ社会批評という用語に置き換えるのか。

3.1. 第一に、これは、社会的に制度化された歴史的構築物としての統計的なものに対する「距離」の取り方に係わる。通常、社会科学は対象にたいして「客観的」な距離をとる認識様式だと言われる。スピノザ主義者のマルクスならこれを “als einen naturgeschichitlichen Prozeß”（自然史的過程として）に対象を把握する（begreifen）ことだと言うだろう。しかし、これは、それだけでなく、社会科学という認識効果生産様式の運動自体が無限の自然史的過程に属しているということも意味しているだろう。しかし、今日、「客観的」という言葉は、そのように理解されない。例えば、「客観的であること」は「主観的であること」に対置され、「あらゆる社会的偏見から自由な、ありのままに対象を見る態度」として理解されたり、「ある共同体のなかで共同主観的に成立し、承認されている約束事」と理解されたりしている。社会科学についても同様で、そのような「客観性」を体現する認識行為として理解されることが多いのである。社会科学という言葉を社会批評という言葉に置き換える理由の一つは、ここにある。社会批評は状況のコンテキストのなかで批評対象に批判的に（生産的に）関与する（介入する）社会的アクトの様式であるからである。

3.2. 第二に、社会科学としての統計学を批評行為として把握することは、統計学という社会的アクトの「居心地の悪さ」を再確認することに役立つと思われる。

3.2.1. 社会科学としての統計学は、一方で、統計の作成過程とその社会的制度の問題に関与するが、第一義的には調査実施者（調査機関）の立場（観点）からそうするのではない。統計調査環境の研究があるが、統計行政の当事者の観点に基づく研究と社会科学者のそれとは異なるはずである。しかし、どのように？［ここで、文学（小説家）と文芸批評家との関係を想起してもよいだろうか；或いは、科学者と哲学者の関係］

3.2.2. 社会科学としての統計学は、他方で、統計の利用に関与するが、第一義的にはさまざまの社会的事象（問題）を解明するために統計資料を駆使する統計利用者（社会科学者、実業家、社会運動家、等）の立場からそうするのではない。統計学は、「大量観察という方法を使って社会を解剖する」という学問規定を放棄し、「方法の学問」という奇妙な地位に自らを限定し、社会を解剖するという課題を他の学問に譲渡したときから、利用に関与しながらも、利用の結果として解明される事柄には第一義的な関心は置かなくなったはずである。あくまでも第一義的な関心事は、利用の過程をナビゲートする技術と方法に置かれたのである。しかし、その技術と方法は、社会的事象を解剖する認識運動の中での統計利用の現実的過程によってしか鍛え抜かれないものなのである［方法に対する実践の優位というテーゼ］。ここでも、社会科学としての統計学は統計利用に関与しつつも、関与しないという「居心地の悪さ」のなかに宙吊りにされる。統計利用の現実的な過程のなかで統計学者は、どのような働きを割り当てられ、どのような貢献をなすことを期待されているのか。実践あるのみ。［ここでも、文学の読者と批評家との関係を想起してもよいのだろうか］

4. 社会批評として統計学を実践するということは、結局のところ、社会･歴史の状況を引き受け、「統計的なもの」の領域に「居心地の悪さ」を抱え込みながら介入していく社会的アクトを社会的･歴史的運動として形成していくことなのである。

… c'est toujours le mauvais côté qui finitpar l'emporter sur le côté beau. C'est le mauvais côté qui produit le mouvement qui fait l'histoire en constituant la lutte.
(Karl Marx, *Misère de la philosophie*, éditions sociales, Paris 1961, p.129 ；☞ 『哲学の貧困』国民文庫、pp.166-167 )